

令和5年9月7日

<佐々木 朗>

令和5年度在宅福祉ふれあい事業ボランティア養成研修(第3回)に参加して

前回に引き続いて、福祉活動の研修会に参加してきました。

1 研修会名 令和5年度在宅福祉ふれあい事業ボランティア養成研修(第3回)(応用編)

2 期日 令和5年9月7日(木)

3 場所 函館市総合福祉センター4階会議室

4 内容

(1)基調講演

「優しさこそボランティアの原点」～子育て世代と地域社会のつながり方～

函館短期大学保育学科 教授 白幡 俊一先生

(2)パネルディスカッション

①ほんわか子供食堂

②函館おもちゃライブラリー

③万代町在宅福祉委員会

5 内容のまとめ

ボランティアには、①災害支援活動、②募金活動、③環境保全活動などがあるが、これに加えて④高齢者、障がい者、子どもたちの支援がある。

1970年代に4歳児180人を集め、目の前にマシュマロを置き15分間「おあずけし」、それができた子にはもう一つマシュマロを与えるという実験を行った。一人になった子どもは、食べるか食べないかの葛藤になるが、およそ3分の2の子どもは、15分を待てずに食べてしまい、残りの3分の1の子どもが2個目のマシュマロを手に入れることができた。その子

令和5年度
在宅福祉ふれあい事業
ボランティア
養成研修
(第3回)

3回目(応用編)
9月7日(木)
13時30分～16時00分

会場 函館市総合福祉センター 5階
対象 函館在住のボランティアに興味のある方 等
定員 50名(先着順)

13:40～基調講演
「優しさこそボランティアの原点」
～子育て世代と地域社会のつながり方～
【講師】 学校法人 野又学園 函館短期大学 保育学科 教授 白幡 俊一 氏
35年に渡る小学校教員経験を生かし、保育・教育の道に進む学生に「教職観」教育の「教育原理」「教育の方法と技術」
「幼稚園教育要領」といった教育分野を指導。
また、「幼児と小学校の連携」「ホープレム問題」「地域社会と教育」「10歳までの子育ての教科書」「子育て文
庫」「コミュニケーション」「福祉と高齢者」「ボランティア教育」といった多岐に渡る研究、講演を通して「人が人
であることの大切さ」を説き及ぼす。

14:30～パネルディスカッション
コーディネーター(進行役): 函館短期大学 保育学科 教授 白幡 俊一 氏
子ども、保護者等への支援(サポート)活動や協働的な取り組み等、市内の実
践例から、子育て世代と地域社会のつながり方を考えます。

実践発表団体(パネリスト)

①ほんわか子供食堂
…大川町にある天理教の母体教会の講堂にて月、週少
金曜日の二回、お楽しみ企画もあり、毎月、100名程
定員する子供食堂。

②函館おもちゃライブラリー
…小学校に入学する前のお子さんを対象におもちゃ
と遊べながら、お友達と一緒に遊ぶことができる
子供食堂。

③万代町在宅福祉委員会
…函館市役所の1号館1階にある在宅福祉委員
会。会員が宅を訪問し、福祉相談、クリスマス会や餅つ
き、盆まき等、充実した世代間交流を企画。

申込み(問い合わせ先)
社会福祉法人 函館市社会福祉協議会
TEL23-2226/FAX23-2224

主催 函館市若松町33-6
TEL23-2226/FAX23-2224

どもたちを追跡調査したところ、後者の子どもたちの方が、一流大学に入り、安定した社会生活ができているという結果になった。我慢強い子、自制心がある子が優秀という結論付けが行われた。ところが2010年代に同じ実験を行ったところ、結果が再現できなかった。一方、親の社会的地位や経済力がある子どもが我慢できているという結果となった。このことから「教育に正解なし」と捉えられるまでになった。

昨今の教育問題が挙げられた。家に持ち帰り、説明も加えた。

- ・毒親問題～子どもに悪影響を及ぼす親、子どもが厄介と感じるような親を指す。
- ・ワンオペ問題～夫婦共働きにもかかわらず

らず。子育ては母親にまかせっきりの育児

・親がちゃ問題～子どもが親を選べない状況をガチャに例えた言葉。良い親の元に生まれることができなかつた子どもは親がちゃに外れたという表現になる。

・ヤングケアラー問題～障がいや病気、介護などケアを必要とする家族がいて、18歳未満にも関わらず介護を担わなければならない子ども

・スマホ育児問題～子どもがおとなしくしてほしい時、親が自分のしたいことがある時、子どもにスマホを持たせて映像を見せたり、操作させたりすること

・ゲーム対応問題～親が子どものゲームとどう向き合って対応していくかということ、一概にゲームを否定するだけではない

・モンスターペアレント問題～学校などに、常識の範疇を越えた要求を繰り返し行う保護者

・母親ペナルティー問題～女性が育児をすることに居って被る生涯賃金の現象。世界のほぼすべての国で女性の育児負担が多く不公平さが指摘されている。

AI(人工知能)が発達してなくなる仕事、なくならない仕事があるが、教師や保育士は人間にしかできない仕事である。「人は、人によって、人になる。」「子どもの「伸びしろ」を伸ばすことができるのは、人だけである。」

子どもは、学校教育、家庭教育に加えて、放課後教育(地域教育・地域環境)が大切である。

放課後教育では、自然体験、社会体験、生活体験を育むことができる。児童館、学童保育所、町会活動、地域子育て

て支援センター、子供食堂、在宅福祉委員会活動などがこれに当たる。

「伝えること」と「伝わること」は違う。「お出かけするから、早くオモチャを片付けなさい。」では伝わらない。片付けなければならないのは親の都合である。どうして片付けが必要なのかを伝えなければならない。

子どもを「ほめる」ことが大切である。ほめることは「認めてあげる」ことである。

子どもを見守ることも大切である。遊びを見守る。学びを見守る。人間関係を見守る。見守るとは、放任することではない。

「よこほめ」は、他の人と比べて優れているところをほめる。「たてほめ」は昨日の自分と今日の自分を比較してほめる。よこほめもいいが、たてほめを大切にしたい。

子どもに絶対にけんかをさせないことよりも、けんかをした後の「仲直り力」を付けることが大切。

「あいさつをしないとだめだよ。」ではなく、子ども自らが、あいさつをすると、気持ちのよい人間関係になることを感じさせる声掛けが大切。

「子どもを伸ばす」「子どもが伸びる」「子どもは伸びたい」これをかなえてあげるのもだめにするのも大人である。大人に責任がある。

大人の責任とは、子どもたちが小さな親切をもらい、そしてその子どもたちが誰かに小さな親切をしていく。このような繰り返しが、大人の優しさのボランティアなのかもしれない。また、子どもを信じるのが真の優しさでもあろう。

ほんわか子供食堂

月に一度大川町で開かれている。100名分の夕食(バイキング)を作るので、前日から大忙しである。この日を楽しみにやって来る子どもたちもいる。この食堂がきっかけで、食をきちんととれるようになった子供もいる、

毎月、予約でほぼいっぱいである。ボランティアを募集している。

函館おもちゃライブラリー

毎週土曜日及び第2水曜日函館市総合福祉センターで開催されている。小学校入学前の子どもが対象で、障がいを持った子どもたちも気軽に参加できる。上手に遊べない子どもや人とかかわりがうまくできないお子さんも、お母さんやボランティアと楽しく遊ぶことができるような場である。ボランティアを募集している。

万代町在宅福祉員会

会食や茶話会を土日祝日に行っている。七夕、敬老会、クリスマス、餅つき、節分、ひな祭りなども行っている。小学生の在宅福祉委員もおり、丁寧な仕事をしている。また、その存在自体でお年寄りたちが笑顔になっている。

感想

私にとって2回目の研修会参加である。日々のやることの忙しさの中に、自分自身の「勉強」の時間を組み込むことによって、多くの新しいことを発見することができるし、また、自分を磨くことにもなると思う。

在宅福祉については、望洋団地自治

会においては、十分充足されているようだが、他地域では、まだまだ、活動者が少なく、ボランティアを募集しているという実態が分かった。

今日のテーマは「子ども」であった。子どもたちを育てる(あえて教育という言葉は使わずに「育てる」を使った。)のは親であり、学校であるが、地域も大きな役割を担っていることを改めて確認することができた。兄弟が少ない環境の中、放課後に子どもたちが自主的に集い、上の子が下の子に教えるような場は大切であるし、時によっては大人が意図的にコーディネートしてあげて、子どもを動かし、育てるということも大切だろう。

函館市社会福祉協議会で、大学生を地域福祉コーディネータに採用していること、子供食堂で、大きい子が小さい子供の配膳・下膳を指導していること、万代町の在宅福祉では、小学校5年生の女の子が、大人に混じって、真摯に仕事を進めていることなど、すばらしい実践をすることができた。

また、9月6日の北海道新聞の「みなみかぜ」にも町内会役員の若返りの記事も掲載されていた。

若い人たち任を与え、成功体験(時には失敗体験)を積むことによって、ボランティアの心を学ぶことができ、また自身も、そこが自分の居場所であると感じ、地域を愛する気持ちが強くなることだろう。

今、人間関係の希薄化が叫ばれる中、今こそ、大人が、多少おせっかいなボランティア精神を持って、地域の閉鎖性に風穴を開けていく動きを取ることはとても尊いと思うし、大切なことだと思う。

私自身20年近く前にこの地域で、自治会活動に携わり、自治会活動の大切さを学んだ。また、仕事柄転勤で、多くの地域を回り、それぞれの地域の町内会活動に携わり、自らも新しいことを企画、実施することができた。

これからもしっかり勉強し、60代という

自分が、どれだけ力を発揮できるか、挑戦していきたい。

会を運営した函館市社会福祉協議会様、講師の白幡先生、実践発表された皆さんには、感謝の思いでいっぱいである。